

## 小林秀雄ノート：その歴史思想を中心に

山田，輝彦

<https://doi.org/10.15017/12247>

---

出版情報：語文研究. 23, pp.54-63, 1967-02-28. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 小林秀雄ノート

― その歴史思想を中心に ―

山田輝彦

## 一、源泉への遡及

「思想」とは、常に海の彼方から舶来されるものであり、品物のように玩弄されては、たちまち捨てられてゆく。これが近代日本の知的風土であり、そこは、したりげな饒舌と不毛の観念論が跳梁する異様な世界でもあった。しかし、鋭敏で強烈な魂が、こういう猥雑さに屈従する筈がない。小林秀雄の批評活動のすべては、こういう「観念論」との激しい、宿命的な闘いであった。

〈あらゆる思想は通貨の様なもので、人手から人手に渡って薄穢く汚れるものです。仏教思想も例外ではない。仏教の厭世思想とか虚無思想とか言はれるものも、その汚れを言ふのであります。芭蕉が、貫道する処は一なりと言った意味は、何々思想とかイデオロギーとかいふ通貨形態をとらぬ以前の、言はば思想の源泉ともいふべきもので、達人達の手によって捕へられたといふ意味であらう。〉（「私の人生観」一九四九・昭二四）傍点筆者、以下同断

一切の既成概念の襖被、源泉への遡及、これが彼の一貫した姿勢である。ある思想が思想である限り、それは通貨形態という抽象性を持たざるを得ないのが宿命だが、抽象化され公式化されて教養目録の中に整理されてしまった思想には、既に誕生の時の鮮烈な生命はない。

〈僕等が担った教養の重荷は、僕等を駆って難問に対して武装させ、無邪気な質問に対しては目をつぶらせる。何故人間は死ぬんだらう、などといふ愚問は、文明人は抱いてはならぬのである。〉（「文芸批評の行方」一九三七・昭一二）

というような空気の中で、「思想の源泉」に遡るのは一つの異常な行為でなければならぬ。亀井勝一郎のように、それを「原始への復帰」と呼んでもよいのだ。（註一）

〈知識のうちには文明人があるが、覚悟の裡には、いくら文明が進んでも依然として原始人が棲んでゐる。〉（「文学と自分」一九四〇・昭一五）と小林が言うとき、彼は衰弱した知性をふり捨てて原始人にならねばならぬことの必要を強調しているのである。

〔現代の知識人には、簡單明瞭な物の道理を侮る風があるが、簡單明瞭な物の道理といふものが、実は本当に恐いものなので、複雑精緻な理論の厳しさなど見掛け倒しなのが普通であります。〕（「文学と自分」）

ここで「簡單明瞭な物の道理」を弁えているのは、小林の好む言葉に従えば「生活人」であり「実行家」である。（註2）「複雑精緻な理論」にすがってしか生き得ないものは、「現代の知識人」である。前者は「体験」と「行為」に賭ける者であり、後者は「観念」と「思弁」に生きるものである。いずれにせよ、小林ほどの本物の知性の持主が、原始への復帰という反知的姿勢によってしか真実を語り得ないところに、近代日本の知識や教養の異常さがある。「通貨形態」としての思想を峻烈に拒否する彼が、政治の欺瞞を嗅ぎとり、直接経験を座標に据えるのは、論理的には極めて必然の帰結である。

〔政治の取扱ふものはいつも集団の価値だ。個人の価値に深い関心を持ったあらゆる政治思想は決して成りたないところに、この思想の根本的欺瞞があり、その欺瞞を現在から計算した近い将来の目的故に是認するところに、政治思想本来の現実的な価値が生ずる。だが、文学は総じてさういふ政治の止むを得ない欺瞞には堪へられないものだ。〕（「文芸批評の行方」）

〔文学者は己れの世界から外へは出ませぬ。己れといっても、観念上の自我といふ様なものではない事は既にお話しした通りです。己れの世界とは言ふ迄もなく自分が直接経験する世界の事です。（中略）この狭い世界だけを確実なものと感じ、この世界の中で自得するより正しい道はないと覚悟する、それが文学者の覚悟だと思ふ。〕（「文

学と自分」）

「私小説論」に於て、公式主義の威力と不毛を二つながら読みとっていた炯眼に、「社会」が見えぬ筈はない。しかし、彼は外へ拡散するエネルギーのすべてを「直接経験」の世界に収斂し、その密度の高い体験と「思想の源泉」を真直ぐに結びつけようとする。

〔人間は正確に見ようとするれば、生きる方が不確かになり、十分に生きようとするれば、見る方が曖昧になる。（中略）見る事と生きる事との丁度中間にいつも精神を保持する事、どちらの側に精神が屈服しても、批評といふものはない。これは理智の上の仕事といふより、寧ろ意志の仕事である。〕（「イデオロギイの問題」一九四一・昭一六）批評とは彼にとつて「生きる事」と「見る事」の緊張関係の上に行われる「意志の仕事」であつたわけだが、それから八年後、彼は次のように言うのである。

〔大切な事は真理（註3）に頼つて現実を限定することではない。在るがまゝの現実体験の純化である。見るところを、考へる事によつて抽象化するのではない。見る事が考へる事と同じになるまで、視力を純化するのが問題なのである。〕（「私の人生観」）

前掲「イデオロギイの問題」に於て、「生きる事」と対照された「見る事」は、いまだ「観察」の域にとゞまっていたが、ここでは、「考へる事」と対照されることによつて、明らかに「行為」となった。

〔念仏と見仏とは同じ事である。仏といふアイディアを持っただけでは駄目だ。それが体験できる様にならなくてはいけない。〕（「私の人生観」）



質に対応する時であろう。これに対し、歴史はわれわれにどういう「能力」を強いるか。

「自然は疑いもなく僕等の外部にある。少くとも、自然とは、これを「対象」として僕等の精神から切離さなければ考へられないある物だ。だが、歴史が僕等の外部に在るといふ事が言へるだらうか。僕等は史料のない処に歴史を認め得ない。そして史料とは、その在るが仮の姿では、悉く物質である。それは人間によって蒙つた自然の傷に過ぎず、傷たる限り、自然とは別様の運命を辿り得ない。自然は傷を癒さうとするのに人間の手を借りやしない。岩石が風化を受ける様に、史料は絶えず湮滅してゐる。湮滅が人間の手で早められるとすれば、それは自然にとって勿怪の幸に過ぎまい。さういふ在るが仮の史料といふものが、自然としてしか在り様がないならば、其処に自然ではなく歴史を読むのは、無論僕等の能力如何にだけ関係する。そしてこの能力は、史料といふ言葉を発明した能力と同一である他はあるまい。この能力には史料を自然の破片として感ずることが出来ないのである。それなら、史料を自然の破片と観するもう一つの能力に対する或能力があるわけで、古寺の瓦を手にする人間は、その重さを積る一方、そこに人間の姿を想ひ描く二重人なのである。」（「歴史について」）

「史料を自然の破片と観ずる」能力とは、小林が「人間を自然化しようとする能力」と概括するものであつて、それは知性であろう。「瓦の重さを積る」能力が知性ならば、「そこに人間の姿を想ひ描く」能力とは何か。この「自然を人間化しようとする能力」と概括されるものは、「言はば存在しないものに関する能力」であり、想像力と呼ばれるものに外ならない。

「自然を人間化する能力は、言はば生き物を求める欲望に根ざす、

本質的に曖昧な力である。無論これは非合理的な力であり、自然は元来人間化などに応ずるものではない。従つて人間化された自然とは、その純粋な形では神話に他ならず、言ひ換へれば僕等の言葉に支へられた世界である。

歴史は神話である。史料の物質性によって多かれ少かれ限定を受けざるを得ない神話だ。」（「歴史について」）

自然に対応する人間の異質の二つの能力は、一方の極限に於て自然科学を生み、一方の極限で神話を生む。歴史は神話である」といふ美しい断定は、現実存在しないものに関する能力がなければ歴史はあり得ないということの詩的な表現である。しかも、「史料の物質性によって多かれ少かれ限定を受けざるを得ない」といふ言葉は、実証性を排除してはまた歴史はあり得ないことを示している。

ここでもう一度「環境」の中の言葉に注目しよう。「この歴史を創る現在の立場を離れて、過去の歴史を振り返るといふ事は考へられぬ」といわれるが、近代の歴史主義に馴致された我々は、この自明の道理さえ観念の迷路の中で忘れてしまう。我々の頭の中にある歴史図式の呪縛から逃れるのは意外に困難なのだ。そのことを彼は次のように言う。

「外物の検証によって次第に真理の世界を築いて行く能力によつては、自然への屈従こそ、その絶対の条件なのだが、言ひ換へれば、自然への屈従によつて、自然の認識はその純粋を期するのであるが、歴史の認識はどうしても純粋な姿を取り得ない。言はば歴史を観察する条件は、又これを創り出す条件に外ならぬといふ様な不安定な場所、僕等は歴史といふ言葉を発明する。生き物が生き物を求める欲求は、

自然の姿が明らかになるにつれて、到る処で史料といふ抵抗物に出会ふわけだが、欲求の力は、抵抗物に単純に屈従してはゐない。この力に於て、外物の検証は、歴史の世界を創つて行く上で、消極的な条件に過ぎないので、どんなに史料が豊富になつても、その網の目のなかで僕等の想像力はどこまでも自由であらうとするだらう。」（「歴史について」）

ここでは、「生き物が生き物を求める欲求」の力に、つまり、生きた人間の生々しい過去への思慕に歴史の根源を認めている。知性と自然の間には、「自然常数」があり得ても、欲求の強さと史料の物質性との均衡は千差万別であらう。小林はこゝに様々な史観の発生する契機をみとめる。それはやがて、「人間は歴史の尺度ではなく、歴史が人間の尺度である」（註2）という倒錯した妄想に対する激しい攻撃となる。こゝで「歴史」というのは、厳密に言えば「史観」であつて、人間の理智の構成した史観が逆に人間を呪縛してゆく危機を述べているのである。

（註1）江藤淳「小林秀雄」二八四頁

（註2）「歴史と文学」第一章

### 三、歴史の客観性

「歴史の客観性」とは、そこに石があるというのと同じ意味で「歴史が存在する」と考えることなのであらうか。小林はこれについて次のように言う。

（客観的といふ言葉が極めて簡単な歴史事実も覆ふに足りない事を、

僕等は日常経験によつてよく知つてゐる乍ら、どうして、限らない歴史事実の集り流れる客観的な歴史世界といふ様なものを信ずるに至るのであらうか。きっかけは恐らく、疑ひやうもなく客観的な自然といふものに衝突せずに、そこに何等かの刻印を遺さずに、歴史は現れる事も出来ず、進行する事も出来ないといふ事情が与へるのである。言はば歴史といふ河が、自然の上に彫らざるを得ない河床に、歴史といふ生き物が、自然の上に投げざるを得ない影に、客観的といふ言葉が纏ひ付き、影によつて実物が類推されるのだ。この無邪気な類推が歴史的存在といふ概念を生む。唯物史観といふ擬科学の土台である。」（「歴史について」）

歴史は自然の空間と時間の中で創られる外はない。人間の意志は「自然の傷」として残る。それが史料であり遺跡であらう。しかし、歴史事実というものは完結した瞬間に消滅する。自然と同じ意味ではどこにも「存在」しない。人間が「与えられた史料をきっかけとして歴史事実を創つてゐる」のだから。史料や遺跡は、ありのままの姿では物質である。物質は客観的存在である。「客観的」という言葉は、最も純粹な形では、人間が物質に対する関係であらう。小林は「歴史的存在」という概念は誤りであるとす。それは歴史認識が自然認識と全く同次元で行われるところに生ずる誤謬である。

林房雄の「西郷隆盛」の批評文の中で、彼はこの問題に触れて次のように述べる。

「歴史を知るのも、人間を知ると同じ事だらう。こちらからことさら観察眼を働かして、隙のない判断だとか解釈だとかを得ようとしてみても決して巧く行くものではない。歴史も亦人間のやうに問ふに

落ちず語るに落ちるものである。》（「林房雄の『西郷隆盛』」）

《歴史観の上で客観主義といふ様なものにこだはってゐるのは、人に対して胸襟を開くことが出来ぬやうなもので、外見は虚心にみえて、実は少しも虚心といふものの真意を解せず、思ひ上つてゐるのであって、本当の意味で客観的な態度でもなければ、実証的な態度とも言へないと思ふ。この態度といふ言葉に注意するがよい。物から離れ、心を空しくする時に、物の客観性といふものが、自ら現れて来るのではない。物に対して透徹した関心を努力して工夫して、はじめて物の客観性を得ることが出来るのである。》（「林房雄の『西郷隆盛』」）

客観主義という立場に固執することは、思い上りであつて勿論虚心ではない。かといって、完全にうつろな、受動的な心が虚心というわけでもない。虚心とは「物に対して透徹した関心を努力して工夫」することであり、「常に努力して己れの鏡を磨い」てゆくポジティブな姿勢でなければならぬ。「問ふに落ちず語るに落ち」た歴史とは、「歴史の客観性」を語る卓抜した比喩である。こういう鋭い比喩によって、歴史の客観性という言葉は初めて科学主義のヴェールをはぎとられ、その微妙な真の意味を回復するのである。

《現代人は、何はともあれ、歴史の客観性だとか必然性だとかいふ言葉を、実によく覚え込んでしまつたのであります。そして歴史を冷たい眼で、ジロジロ眺めてゐる。暖い眼でも向けたら、歴史の客観性が台無しになつてしまふとも思つてゐるらしい。そして無論心算してゐるわけではない。したがつて皮肉屋になる。しかも、単なる皮肉屋に墮してゐることに、なかなか気がつかない、自分は歴史を正しく見てゐると思い込んでをりますから。はたして正しく見てゐるの

だらうか。それとも、ただ冷淡に構へてゐるのだらうか。》（「歴史と文学」）

武装した冷たい眼が「客観性」を得るのではない。そういう眼は「歴史の埒外に身を置」いた眼である。そういう眼のとらえる歴史とは、自然科学的時間の中に置かれた図式に過ぎぬではないか。小林はまた、

《歴史は眼をうつろにしてゐさへすれば、誰にも見はるかすことのできる、平均にならされ、整然と区別のついた平野のやうなものではない。》（「歴史と文学」）

とも言う。そして、「うつろな眼」でも、「冷たい眼」でもない。「暖い眼」の必要を説くのである。

《歴史を貫く筋金は、僕等の愛惜の念といふものであつて、決して因果の鎖といふやうなものではないと思ひます。》

と断定する時、「歴史は思い出である」という独自の発想が生れるのである。

#### 四、歴史の一回性

小林の歴史論に「思い出」という言葉が最初に現われるのは次の部分である。

《歴史は繰り返す、とは歴史家の好む比喩だが、一度起つて了つた事は、二度と取返しが付かないとは、僕等が肝に銘じて承知してゐるところである。それだからこそ、僕等は過去を惜しむのだ。歴史は人類の巨大な恨みに似てゐる。若し同じ出来事が、再び繰り返される様な事があつたら、僕等は、思ひ出といふ様な意味深長な言葉を、無

論發明し損ねたであらう。後にも先にも唯一一回限りといふ出来事が、どんなに深く僕等の不安定な生命に繋つてゐるかを注意するのはいい事だ。」（「歴史について」）

歴史的な事件というものは、すべて、はかない生に於ける換置すべからざる邂逅である。歴史の一回性は、生そのものの不安定によつてその嚴肅さを倍加する。彼はここでも、日常経験の中から、歴史に関する根本の「技術」をさぐつてゆく。

（子供が死んだといふ歴史上の一事件の掛替への無さを母親に保証するのは、彼女の悲しみの他はあるまい。どの様な場合でも、人間の理智は、物事の掛替への無さといふものに就いては、為す処を知らないからである。悲しみが深まれば深まるほど、子供の顔は明らかに見えて来る。恐らく生きてゐた時よりも明かに。愛児のささやかな遺品を前にして、母親の心に、この時何事が起るかを仔細に考へればさういふ日常の経験の裡に、歴史に関する僕等の根本の知恵を讀取らう。それは歴史事実に関する根本の認識といふよりも、寧ろ根本の技術だ。其処で、僕等は与へられた歴史事実を見てゐるのではなく、与へられた史料をきっかけとして、歴史事実を創つてゐるのだから。

）（「歴史について」）

古人への愛惜の情が深ければ深いほど、歴史は明確な姿を見せるのである。「与へられた史料をきっかけとして、歴史事実を創る」というのは、歴史の秘密に迫る的確な言葉である。「見る」ことは単なる認識だが、「創る」ことは「技術」であるそして、この「技術」の最も原初的な形は、「ささやかな遺品」と深い悲しみとさへあれば、死児の顔を描くに事を歎かぬあの母親の技術」つまり「思い出」という能力なのである。

しかし、複雑精緻な理論で武装した様々の史観の洪水は、この最も素朴な「思い出」の技術の行使をさまたげる。戦後、小林はこの問題にふれて次のように言う。

（歴史の見方が発達して来ますと、過去の時間を知的に再構成するといふ事に頭を奪はれ、言はば時間そのものを見失ふといった事になり勝ちなのである。私達が、少年の日の楽しい思ひ出に耽る時、少年の日の希望は蘇り、私達は未来を目指して生きる。老人は思ひ出に生きるといふ。だが、彼が過去に賭けてゐるものは、彼の余命といふ未来である。かくの如きが、時間といふもの不思議であります。この様な場合、私達は、過去を作り直してゐないとは言はぬ。過ぎた時間の再構成は必ず行はれてゐるのであるが、それは、まことに微妙な、それと気付かぬ自らなる創作であります。（中略）私達の思ひ出といふ心の動きのうちに、深く隠れてゐる、この様な技術が、歴史家達に、過去にあつた他人達を思ひ出す時に、応用出来ぬわけがありますまい。）（「私の人生観」）

いづれにせよ、過去の時間の再構成がなければ歴史はあり得ない。その場合「知的な再構成」と「それと気付かぬ自らなる創作」とはいずれが「客観的」であり得るか。勿論後者である。そして、後者が「思い出」の技術である。ここには、しばしば誤解される感傷的な観念論とは全く別の、極めてリアルな歴史への接近、或いは歴史の喚起がとかれていたのであって、それはディルタイの「追体験」に似た思想である。丸山真男は「日本の思想」に於て、日本人の精神生活に於ける思想の「継起」のパターンとして（過去は過去として自覚的に現在と向きあわず、傍におしやられ、あるいは下に沈降して意識から消え、「忘



却」されるので、それは時あって突如として「思い出」として噴出することになる」と述べ、「思い出」を「忘却」の反対概念として提示しているのは、小林の「思い出」の全く恣意的な歪曲である（註1）。

小林の「思い出」という言葉は、歴史とは「掛け替へのないその日その日」であったという痛感に裏づけられている。彼の歴史観の底には、人生とは「二度と生きてみる事は、決して出来ぬ命の持続」だという強烈な生の燃焼がある。宮本武蔵の「我事に於て後悔せず」という言葉に註して「自分の生きて来たことについて、その掛け替へのない命の持続感を持って」、註2）と言ひ、「行為は別々だが、それに賭けた命はいつも同じだ、その同じ姿を行為の緊張感の裡に悟得する」（註3）と言う時、日々は絶対であり、全過去は肯定される。「あらゆる歴史事実を、合理的な発展図式の諸項目としてしか考へられぬ」（註4）歴史発展の理論は、日々が窮極の目標への段階であり、相対的価値しか持たぬという意味で小林の峻拒するところとなる。既にはやく、有名な「近代の超克」座談会（一九四二・昭一七）に於て、

〈近代の史観といふものを、大きっぱい言えば、歴史の変化に関する理論と言えらると思ふのですが、これに対して歴史の不変の理論というものも可能ではないかと考えるのです。〉（註5）

という発言が見られる。いうまでもなく、「近代の超克」は、戦時下の政治的要請にこたえて、ヨーロッパ的なものを克服して、日本的なものを再確認しようとする、別の意味の発展史観であったが、彼はそれを逆手にとって発展史観そのものの虚偽

をたたいたのである。

（註1）丸山真男「日本の思想」一一頁―一二頁

（註2）（註3）「私の人生観」

（註4）「歴史と文学」

（註5）「反近代の思想」（現代日本思想大系）四八頁

## 五、形としての歴史

小林は日本の古典文学について、

〈自分は古典を読んで知るといふよりも、むしろ古典を眺めて感ずる術をおぼえた気がしてゐる。〉（「年齢」一九五〇・昭二五）

と言っている。古典のこういふとらえ方は歴史に於ても全く同じである。「歴史について」に於て述べられた「思い出」の技術は、「歴史と文学」に於ては次のようになる。

〈歴史事実とはかつて或る出来事があったといふだけでは足りぬ。

今もなほその出来事が在ることが感じられなければ仕方がない。母親はそれを知ってゐるはずで、母親にとつて、歴史事実とは、子供の死ではなく、むしろ死んだ子供を意味すると言へませう。〉

「子供の死」は抽象的事件だが、「死んだ子供」とは具体的な形である。歴史は具体的な「形」として感じられなければならないものなのだ。江藤淳が、この部分を引用して、「彼は既に歴史を生きはじめてゐる」と言ひ「実証」する観察家から行動家に変身し」といふのも、この限りに於ては充分首肯できる。

（註1）「形」とは勿論「観念」の対照語であつて、この言葉は小林の歴史観を解く鍵の一つである。

「無常といふ事」の冒頭は美しいが、そこで彼は一言芳談抄のなかの短文を（当時の絵巻物の残欠でも見る様）に思い出し文の節々を（古びた絵の細勁な描線を辿る様に）辿つたと書いている。小林にとつて、歴史にふれるとは、色彩と線によつて作られた具体的な形にふれることであつた。その時の感動をふりかへつて、彼は更に次のように続ける。

（僕はただあるうち足りた時間があつた事を思ひ出してゐるだけだ。自分が生きてゐる証拠だけが充滿し、その一つ一つがはつきりとわかつてゐる様な時間が。無論、今はうまく思ひ出してゐるわけではないのだが、あの時は、実に巧みに思ひ出してゐたのではなかつたか。何を鎌倉時代をか。さうかも知れぬ。そんな氣もする。）

「思い出す」ということは、具体的なイメージとして換起されることだ。觀念としての歴史は、理解することは出来ても、感じることは出来まい。形として体験された時、始めて歴史は生きられ、生は充足する。恐らく彼の歴史の追求が行きついた窮極と思われる次の言葉に注目しよう。

（歴史の新しい見方とか新しい解釈とかいふ思想からはつきり逃れるのが、以前には大変難かしく思へたものだ。さういふ思想は、一見魅力ある様な手管めいたものを備へて、僕を襲つたから。一方歴史といふものは、見れば見るほど動かし難い形と映つて来るばかりであつた。新しい解釈なぞでびくともするものではない。そんなものにしてやられる様な脆弱なものではない、さういふ事をいよいよ台点して、歴史はいよいよ美しく感じられた。）

歴史を形として感ずることができた時、「歴史の魂に推参する」行為は、はじめて完了する。こういう思想は、戦争の劫火

の中をくぐつても全く変らなかつた。先にあげた「年齢」という短文の中で、彼は

（上手に思ひ出すとは、過去が見えて来る、或る形として感じられて来るといふ事である。伝統とは習慣の様に、誰もその中にゐるといふ様なものではあるまい。寧ろ各人がその能力に応じて創り出す過去の形であらうが、その形は誰にも定義することが出来ないのである。）

と述べている。小林にとつて、歴史とは必竟「解釈を拒絶して動じない」美しい形である。こういう発想は、恐らく造型美術によつて練磨された彼の視覚と無関係ではあるまい。「物を作らぬ人」だけ、美は觀念なのである」（註2）と彼はいうのだが、「歴史を創らぬ人」だけ、歴史は觀念なのである」というのが、小林の歴史論から自然に導き出される結論である。

（註1）江藤淳「小林秀雄」三〇八頁—三〇九頁

（註2）「私の人生観」

## 六、追記

小林秀雄は昭和の最も独創的な思想家といわれる。しかし、その「独創」は常に自明の「常識」の徹底的深化という点にあるので、晦渋な文体の底に鈿脈のように輝く美しさは、感傷や虚偽の影が全くないところから来る。彼の評論の中には、昭和の時代が直面した思想の本質的問題のすべてが包括される。彼ほど時代の返り血を満身に浴びた思想家はあるまい。マルキシズム、私小説、思想と生活、戦争、歴史、こういう大きな問題を強い氣魄で論断して行く彼の姿は、まさに「思想の武士」（

角川文庫「私の人生観」解説)にふさわしい。特に歴史の問題は理論化の困難を宿命として背負っている。まして小林の歴史論は記述ではない。表現である。時には歌でさえある。その鋭利直截な文体のきらめくような硬質の美しさを感じることもなくして、論理の筋だけ追うのは無意味である。

この小論は表題のごとく「ノート」であり、彼の歴史像の輪郭を私なりに納得したい欲求に駆られて書いた。この種の文として、原文の持つ生命感が分解されてしまうのは残念である。小林の文には、ただけしい叫喚は全くないが、読むことによって生を鼓舞されるという意味で、やはり現代に於ける稀有の名文である。それは常に緊張した生命が対象に切りこむ衝撃を伝えて来るからである。

彼の眼はいつも生の根源を凝視する。人間が人間である限り生そのものの根源は時代によって変るはずがない。それ故、歴史というごとき、時代の政治の影響を最も敏感に受けるものを対象としても、その時代を超えることができた。人皆争って「真」を求めた戦後の混乱期に、彼は「美は真の母かも知れないのだ」(「モーツアルト」一九四六・昭二一)と言っている。「真」は遂に相対的なものだが、「美」とは人を沈黙させる絶対的体験である。小林のすべての評論の中に鳴り響いている主調低音は、この短い言葉の中に凝縮された思想である。

(一九六五・七・二六)

▼受贈雑誌 昭和41年7月〜12月(その二)

(四一頁よりつづく) 日本文学誌要(法政大学) 15、短大論叢(関東学院短大) 28・29、社会科学(同志社大学人文科学研究所) 3・4、東北大学教養部紀要4、日本大学人文科学研究所研究紀要8、中世文芸(広島大学中世文芸研究会) 35・36、語文(日本大学国文学会) 24、国語国文研究(北海道大学国文学会) 33、国語学(国語学会) 65・66、文化(東北大学文学部) 1・2、軍記と語り物3、言語と文芸47・48、古典論叢10、国文(お茶の水女子大学国語国文学会) 25、語学文学会紀要(北海道学芸大学) 4、能楽思想37、音声学会会報122、

▼受贈抜刷

近松の道行(筑紫女子短大紀要1) 橘 英哲  
黄表紙「黒白水鏡」評説(九州女子大学紀要) 市場直次郎  
露伴の名人ものと禅―「一口剣」「五重塔」「風流仏」―瀬里 広明  
真名本伊勢物語―助動詞の表記をめぐる― 佐田 智明  
(北九州大学開学二十周年記念論文集)

奈良絵本と丹緑本

天理図書館